

広島俳句倶楽部

令和三年九月作品集

平和公園の夏

知佳子

例年、多くの外国人や家族連れが訪れる夏の平和公園も、コロナ禍で来訪者が少なく、石畳の暑さをより厳しく感じます。そんな中、朝早くや日が落ちてからの時間には鳥や蝉、木々に心を癒されますし、真昼の本蔭の涼しさにはほっとします。

手入れの行き届いた慰霊の地では、行き交う人と自然に挨拶、会話を交わすこともあり、心穏やかな時を過ごすことができます。

早く平時に戻り、多くの方を迎えることができるようになればと思います。

手の届く枝に鳥来る梅雨晴間

白蓮の開くを人に問うてをり

緋目高を追うて池の辺歩きたる

手を入れて水馬の水揺らしたる

梧桐を見てゐる顔に朝日さす

夾竹桃見上げて話してゐたり

杖の音極暑の石を進みけり

夏の月大きく残る夜明かな

手の中の油蟬鳴く朝かな

蟬止まるままの鞆を持ち上ぐる

《作品鑑賞》

亜矢

「平和公園の夏」は、朝の自然に焦点を当てた作品である。目を向けがちな原爆ドームや慰霊碑は出てこない。平和公園の静かな営みを再発見することができた。次回行ったときには、一層じっくりと物を見てみようと思った。

手の届く枝に鳥来る梅雨晴間

作者と鳥が対話しているかのよう。双方の喜んでいる様子が目に浮かぶ。

緋目高を追うて池の辺歩きたる

素早く泳ぐ目高を見失いたくないと、目をこらしながら歩いている。子供に限らず、そうしたくなるもの。

手を入れて水馬の水揺らしたる

池で水馬を見つけた作者は、水を揺らすとどうなるか気になり、思わず手を入れた。興味津津に目を輝かせていたことだろう。目高の句との行動の遠いが印象的だった。

川の道(夏の太田川を辿る) 村上正人

新しい道路は車で走るのに都合がよいように、トンネルを掘り、橋梁を渡して出来る限り直線移動できるような造りである。昔の道はそうではなかった。川に沿って造られた道は、狭くてゆつくりとしか進めない。一方で自然の恵みと怖さを目の当たりに感じる事ができた。

この夏、自身が中高生るとき自転車であつた道を久しぶりに、車を停めながら辿ると、まだ残っている自然をなつかしく感じる事ができた。

白鷺の集まる中洲朝日差す

峰雲のもと溪流に魚を釣る

泳ぎ子の淵に飛込む岩場かな

涼しさや断崖のある川の道

滴りに寄れば吹きさたる山の風

尾根よりの岨道辿り滝に着く

大岩に立ちて浴びたる滝飛沫

滝壺に湧き立ち沓の流れかな

夕立のあとの夕日や川の町

川を吹く風に飛びたる蜻蛉かな

《作品鑑賞》

並矢

「川の道」は、作者の思い出の道を、愛情をもってありのままに詠んだ作品である。現代社会の人間の営みとは別の世界を切り取っている。

涼しさや断崖のある川の道

自然の厳しさと恵みの両方が伝わる句。十句の中で、この道を象徴する位置づけの句であると思われる。単なる写生に終わっていない。

大岩に立ちて浴びたる滝飛沫

飛沫を浴びながら、作者は何を思ったのだろうか。もしかすると、少年時代は一度も浴びたことがなかったのかもしれない。

川を吹く風に飛びたる蜻蛉かな

上五に惹かれた。作者の内面をうかがわせる。いつまでも、蜻蛉の飛ぶ川であり、道であってほしいと願うばかりである。

鮎跳ねて誰かボートを漕ぎ出せる
茂へと激しき雨となりけり
この谷のと或る死のことあまご釣る
竹煮草見てこの谷を去りにけり
花令歡や十方山の見えてくる
夕蟬にますます雲の白きかな
蓮の実に三日三晩の雨となる
虫鳴くや三日三晩の雨止みて
長雨のあとの秋蟬聞いてをり
芙蓉咲く家の家人を知らざりき

佐保光俊

まだ明けぬ夜に目覚めたり夜鷹鳴く
芭蕉打つ雨脚強くなりけり
窓に寄り次の稲妻待つてをり
雨のなか人それぞれの墓参り
雨あがり石段に聞くつくつくし
仏壇の祖父の徽章や敗戦忌
天の川眺めてゐたる峠道
桐の実に少し色づく朝となり
その角を曲がれば萩の垣根かな
今年また来し参道の萩の花

村上正人

蟬の声夜通しの雨いま止みて
朝の蟬軒下に来て鳴き出せり
夕焼や雁木に人と犬の居て
蛸を聞きながら山下りけり
杖で道教ふる人に蜻蛉来る
稲の穂にだんだん雨の強くなる
稲の香やいま山里に日の差して
この田からあの田へ吹いて稲の風
白萩になかなか止まぬ夜の雨
海山を叩いてゆける秋驟雨

島尾ひとみ

夕顔の花咲く塀を見上げたり

草刈の跡に雀の群れてをり

鼠花火大声あげて眺めたり

冬のご草風に揺れるる鉄路かな

五葉松に爪研ぐ猫や秋の雲

白壁の塀に枝垂れて萩の花

白萩の咲き盛る庭訪ねたり

秋の日や瀬に立つ川鶉羽広げ

川岸の木立の中に曼珠沙華

庭に鳴く虫の声聞く雨の朝

秋沙

外に出れば蟋蟀跳びつく夕まぐれ

裏本戸を開けば足に露しとど

秋雨に髪濡れしまま僧の来る

寺訪へば参道の萩こぼれけり

鹿鳴くや奥行深き島の家

久々の友へと藪を蒸かしたる

海峡を行き交ふ船や星月夜

裏畑に風の道あり穂紫蘇摘む

城の木を吹きぬけて来る秋の風

四阿に日のあたりたり薄紅葉

あざみ

教会の十二時の鐘秋近し

県名を書いて覚ゆる夏休

生垣の低き葉の光蟬の殻

大学の広き中庭蟬時雨

鳥籠の横でももの書く初秋かな

鯖雲や被服支廠の壁の染み

鈴植のオリーブ揺るる秋の風

隠し味カレーに入るる敬老日

秋ともし伴奏曲をさらひをり

車椅子いつもの道を押す秋日

亜矢

夏の潮清盛塚へ寄せにけり

船を待つ棧橋横で穴子食ふ

景洩れ日の石段上る蟻の列

本川の雁木に遊び子らの夏

見渡せる夏野に犬の影走る

山々の遠く見えたる今朝の秋

坂の上息整ふる残暑かな

まづ姉の墓に行きたる盆の入り

爽頼の松原越しに船過ぐる

雨の降る浜辺に鹿の親子くる

井藤希

鰯雲飽かずに見たる旅の本

乱杭に鴨の紛るる河口かな

登園に泣く子の握る猫じやらし

通学の列を過りて赤とんぼ

コスモスや通園鞆も揺れてをり

鬼灯の手付かずのまま赤くなり

秋の灯や微かに浮かぶ蔵書印

種採つて今年の花壇終りけり

秋澄むや鉄の音の聞こえる

バス待ちの列を乱して秋の蜂

栄吉

山藤の揺れ止みてより日の差せり

水底の砂の流るる晩夏かな

沖合の岩に厄日の夕日差す

虫時雨ピアノの音の止みてより

休み田を行つては戻る秋津かな

父と来て小鰯を釣る日曜日

おのおのの道に分かれて栗拾ふ

無花果の枝の広がるビルの裏

出来秋や集落に沿ふ用水路

秋の日に猫の耳透く窓辺かな

暁子

犬の紐引いてサンダル履きの道

竿振れば麦稈帽に針掛かり

浮子揺れて渡し船より帰省客

突堤に少年の釣る夏の果

日焼して魚籠の重きを持ち帰る

夏の夜防災ラジオに目覚めたる

長雨に今年の夏の終りけり

盆の果てキヤリーバッグで空港へ

塵線に沿うて咲きたる緋のカンナ

秋風や早も絵具の乾きたる

新涼や激しき雨の過ぎし朝

竜胆の咲く山にまた登りたき

秋雨の夜に座し文を書きゐたり

秋の蟬米研ぎ終へた時に鳴き

夕づきて蟋蟀の声すぐそこに

虫しぐれひと際高き声のあり

小鳥来て林の中を過りたり

試歩のとき襟元抜ける秋の風

待ち合はす場所の目印萩の花

靴履けば羽音を立てて蚊の名残

町内に花屋の開く秋日和

園児らの遠ざかる声秋の風

秋草の庭にて母を待ちゐたり

秋の灯を見つめて橋を渡りけり

風止みて満月高く昇りけり

もう一度立ち止まり見る今日の月

山腹の初紅葉見る雨上がり

薄原郊外バスの通りけり

後姉への便りを書いて秋の朝

体操着並べ干したる秋の庭

新庄憲彦

すみれ

知佳子

虫の声聞きつつ入る仕舞風呂

台所夜通しちちろ鳴きにけり

草むらへ部屋のちちろを帰したり

朝まだき裏の畑の虫時雨

轡虫ここの茂みで鳴いてをり

行くたびに母の秋茄子収穫す

秋茄子を近所の寺にお裾分け

古里に早も咲きたる曼珠沙華

故郷のあちらこちらに曼珠沙華

母が家の裏山に咲き曼珠沙華

ちどり

炎天を引き返すには息足りず

一筆に込める一文字秋涼し

柿の実の色づき始む二個三個

月白の音なき川の流れかな

一湾の隅々までも良夜かな

鰯雲平和大橋流れゆく

秋の風イエスタデイの聞こえる

主語述語並べ直して夜の長し

秋の夜繕ひ物に歯を使ひ

林檎食べまた新しき点字打つ

友岡葉山子

耳元に風の裏声台風圏

橋のアーチ最上点に野分ゆく

繁みより信子目覚め秋の夜

笑い声消えてようやく夜学らし

駅前は夜業の都となる深夜

夜をべしてやとパジャマのゴムを抜く

長々とおはぎ注文敬老日

道なりを蜻蛉同士が競り合うか

滝の粒ふんわり飛んで水澄める

冷ややかに石畳踏む角の鹿

ふじ女

校庭の蛇口に夏の日差かな

山側に人の声して墓洗ふ

突堤へ自転車漕いで花火見る

盆の夜思ひ出ばなしに枕寄せ

蛸の雨の合間を鳴きにけり

踏切の音のしてゐる木槿かな

雲梯にぶら下がり見る鰯雲

日だまりのごとき椿の実を拾ふ

カンナ咲く横を白衣の医学生

蛸に暮れゆく道を歩きけり

松田裕子

油蟬我に向かひて飛んで来し

坂くだる我を逼ひ越し鬼やんま

鶺鴒が車の前を歩きをり

昨日より遠き散歩や秋日和

ベランダに時をり聞こえ虫の声

久々に行く美術館秋の午後

蓮の実の四方へ飛んで寺の庭

里帰り無花果の数かぞへたり

稲の香の家の奥まで届きけり

薄の穂わづかに出でて風に揺れ

美耶

叱られてまだ夕焼の中に居る

浅漬の瓜が好きでと音を立て

糶果てし魚市場の残暑かな

脇道を通ればふれて葛の花

天高し退職願提出し

川土手の風に吹かれて草の絮

逢ひたしと風につぶやく素秋かな

鮎うるか家苞にして酌み交す

三味の系爪弾いてゐる夜長かな

玻璃越しの風の音聞く夜長かな

森口良樹

被爆柳風の吹くまま街にあり

原爆忌ラジオの前に黙祷す

せせらぎに對の蝶舞ふ墓参かな

叔父叔母の踊つてゐたる阿波踊

新米を取りに帰れと母の声

蚯蚓鳴く道を城まで登りたり

小料理屋月見団子を飾りけり

鯉釣や孫にいろいろ指図され

麻痺の手の中で転がす胡桃ふたつ

綾乃

右の道はの暗きかな文字摺草

雷鳴に叩かるるごと目覚めけり

文鎮の影の短く秋日和

ビルの影川面に揺るる九月かな

海からの風に秋草揺れどほし

萩叢の花屑掃けばすぐに散り

改札を出て遠き灯や虫すだく

城跡へ虫の音続くつづら折り

秋深し名刺の裏に四つ葉貼る

大橋博子

雷去りて黒松の葉のみづみづし

蟬しぐれ公園の雨いま上がり

蚊遣して玄関にする立話

括りたる玉葱外す夕餉どき

焼茄子のボンと弾けて香りたる

月明り借りてポストに歩み寄る

芒野の向うに瀬戸の海見ゆる

一叢の芒の上を風の吹く

菊月になりての庭に風そよぐ

宮田保江

鎮守から祭太鼓の聞こえる

つくつくし厨の窓に日々聞いて

ひとしきり鳴いて色鳥去りにけり

稲の咲く棚田の畦を上りたる

ふれながら行くこの道の草の花

息とめて零余子の蔓を引きにけり

棹借りて丁寧に櫓ぐ熟柿かな

秋苗山里に聞く水の音

床に入り絵本を読める夜長かな

山野ウタ

酌み終り暖簾を出れば冬の月

帰路に見るビルの間の朧月

穴道湖の揺れどほしなる夏の月

鉾杉の高きに月の出でにけり

雲の間に見えては隠れ今日の月

月高し空海の本読みをれば

この庭の水面に映り真夜の月

有明の明石の海を拝みけり

阿姫

つと背ナに汗の流るる防護服

庭蔭のそこだけに咲き花茗荷

藤袴に誘はるるかに蝶の飛び

庭仕事終へて虫の音聞こえたる

彼岸花咲いて故郷を思ひけり

曼珠沙華あちらこちらの畦に咲き

曼珠沙華ヘッドライトに照らされて

仕事終へ丘から眺む瀬戸の月

大畑恵

藤寝椅子本を落として目覚めけり
髪濡れて、パジャマの子らの手花火す
見入る子の目に映りたる花火かな
女房の手作りの紫蘇ジュース飲む
夜半過ぎのちちろの声に目覚めけり
ちちろ鳴く厨にありし母の声
別れゆく人を見送る十三夜

英一

男の子電話してゐる月夜かな
背中まで深く息して良夜かな
目の覚めて月煌々としてをりぬ
人の声ふいに近くて秋の風
秋風や新しくする庭簾
階段を下りて湯を飲む夜長かな

桑門わかこ

長雨の終りて吹ける秋の風
部屋のかなか迷へる蜻蛉追ひかけて
秋風に牧草揺れて牛の居る
彼岸花一輪残し草を刈る

上島康子

日の差してみんみん蟬の鳴きしきる

そこそこに水引の花はびこれり

群がりて彼岸花あり夕間暮

仕事着を干しながら聞く虫の声

紀英子

水草に卜の字に止まる系蜻蛉

木道をついと横切る蜻蛉かな

手を伸ばす先へ先へと赤とんぼ

棉の実を両手で包み頬に当つ

熊谷ゆり子

山晴れていつもの道に秋の風

赤とんぼ目の前よぎり飛びゆけり

家々の壁の耀く野分あと

秋空の前後に歩む翁と媼

やす保

夕暮の車窓横切る蜻蛉かな

マスカット粒と粒とが押し合ひて

秋の日や嫁ぐ娘と家具選び

秋風や箆笥の跡のある畳

山崎桂子

秋風の薬師堂まで母と来し

秋風や小犬と試歩の老二人

不老てふ山門に立ち秋の夕

遠藤さつき

店先の秋の色にと染まりけり

秋の雨ゆるやかに降り土染まる

穂芒の風にゆれるよ風まかせ

かこ

意言館にピオロンの樂秋の風

父の背に子の眠りをり蜻蛉飛び

金木犀坂の上より香りけり

高嶋絹代

かなかなの鳴く声のして日の落つる

山門に飛び交ふ蜻蛉風吹いて

まへうしろちよと上にも赤とんぼ

民

雨の手に貰ひ受けたる茗荷の子

目の前にカタカナ描いて蜻蛉飛び

秋風の通る座敷に本を読む

ちかこ

人住まぬ隣家に咲けり曼珠沙華

無花果に採るべからずと札掛かり

秋風や母と詣でる嚴島

撫子

空一面とんぼう群れてゐたるかな

蜻蛉の杭に止まつてゐたるかな

大花野ジエンカを歎ひ跳ねるなり

穂高

道すがら花壇の奥の小鳥見て

小走りに葡萄着く日の玄関へ

秋風に雑草長けて揺れてゐる

みさ子

大相撲派手な色の化粧回し

天高しボールを飛ばす大谷さん

阿波久

コロナゆゑ中止となりし秋祭

花器磨くただただ磨く秋思かな

津田玲子

令和三年八月度作品集より

すみれ 私の選んだ十句

白蓮に止む気配なき今日の雨	佐保光俊
熱帯夜月の残れるままに明け	村上正人
梔子の花の夜風に香りたる	高尾ひとみ
朝顔の一輪咲いて安堵せし	秋沙
露草を一輪挿せる朝餉かな	あざみ
研ぎ水を花壇へ注ぐ夏の夕	亜矢
蛸に覚めてまた読む放浪記	暁子
ペランダの鉢に秋茄子揺れてをり	阿姫
青蛙追へば葉蔭に飛び込んで	宮田保江
網戸から峽の風入れ祖母の家	山野ウタ

ちどり 私の選んだ十句

白蓮に止む気配なき今日の雨	佐保光俊
熱帯夜月の残れるままに明け	村上正人
自転車漕いで見にゆく大夕焼	高尾ひとみ
朝顔の一輪咲いて安堵せし	秋沙
あかときの罨にかかりし猪を見る	あざみ
西日差す間口の狭き古本屋	亜矢
帰省子をいつもの橋に待ちあたり	暁子
海までの道を下りて野分晴	知佳子
稲の穂を握り重さを確かむる	友岡案山子
久々の生家の跡や稗熟れ	阿姫